

◆参考資料

【時代背景】

阪神間モダニズム：

大正中期以降、急速に加速した大阪の都市化により、人口過密や公害が問題となり、それを避けるべく、人々はより良い住環境を求めて郊外に移住するようになる。阪神間に美術家たちが居住するようになるのも、ちょうど同じ頃である。当初は、芸術的な関心からというより、静かな制作環境を求めて集まる者がほとんどであったが、次第に、阪神間独自のモダンな美術表現が育まれるようになる。

小出（檜重）は阪神間の文化に根ざしたモダニズム表現を生み出した画家であると言われている。小出は、阪神間の中でも早くから別荘地として開けた芦屋に純洋式のアトリエを構え、徹底してモダンな生活を送る中で、多くの裸婦画を制作した。平井章一は、「小出こそ芸術的志向と阪神間の風土をマッチさせた最初の美術家であったといえるだろう」と述べ、小出の画業の発展と芦屋という土地の結び付きを強調している。

小出が43歳という若さで没した1931年(昭和6年)から、戦争の影が次第に世相を暗く覆うようになる1940年(昭和15年)頃まで、阪神間は正に「ベル・エポック」とでも呼ぶべき華やかな時期を迎える。

「ベル・エポック時代」に生きる人々は、洋風のモダンな生活というものがすでに日常となっており、近代というものを感覚として捉え、表現するようになっていた。そんな中、阪神間のモダニズムを感覚的に、かつ純粋に表現したのが吉原治良である。吉原の特徴は、ヨーロッパの最新の美術様式を積極的に取り入れたことにあるが、吉原の登場に刺激されるかのように、昭和10年代の阪神間には、明らかにヨーロッパの新しい美術の影響を受けた洋画家たちが多く現れるようになる。

【時代背景】引用元

津田奈菜絵、「小出檜重と阪神間モダニズム」, 表現文化研究, 神戸大学表現文化研究会, 第8巻, 第2号, pp113-126, 2008,

【長谷眞次郎 略年譜】

1940年（昭和15年）旧京展入選。これが2015年までの調査で明らかになっている最古の公式記録である。

1943年（昭和18年）には川崎重工神戸工場に所属している記録あり。意匠等表現的な能力が求められる部局にて勤務していた記録が残されている。

1963年に死去。現段階の調査から眞次郎氏の作品は「具体美術の作品」とは言えない。しかし、活動の時期がオーバーラップしており、関係性・影響関係などについて今後、研究・考証が予定されている。

【長谷眞次郎 略年譜】 参考文献

阪神間モダニズムと具体のはざままで、よろず出版, 2016

【具体美術】

1954年吉原治良のもと結成された「具体美術協会」（以下「具体」）は、72年の解散までの活動全期18年を初期、中期、後期と3つの時期に分けて捉えることができる。野外展や舞台の使用といった実験的要素の強い時期を初期、それに続く絵画主導型の展覧会が続く時期を中期とし、最後にオプティカルなものやハードエッジな作品など表現が多様化する時代を後期とする。

「具体」と抽象表現主義を同等に論じる為の土俵を設定したといえる。このように、尾崎は「具体」の特徴をフォーマリズムからの逸脱と認識した上で当時の絵画の問題を設定し直し、逆照射することによって「具体」を世界の美術動向の中に位置付けた。

【具体美術】 引用元

竹澤秀孝, 「初期具体美術協会について」, デザイン理論, 関西意匠学会, 46巻, pp.166-167, 2005